様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １１ 日現在

機関番号：３２６８９
研究種目：若手研究
研究期間：2018～2023
課題番号：１８Ｋ１２２１８

研究課題名（和文）英国慈善組織協会（COS）のチャリティおよびケースワークの思想史研究

研究課題名（英文）The British Charity Organisation Society's Philosophies of Charity and Casework

研究代表者
寺尾　範野（Terao, Hanno）

早稲田大学・社会科学総合学術院・准教授

研究者番号：８０７３５５１４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は主に以下の３つの成果を得た。（１）COSの社会福祉思想とニューリベラリズムの間に思想的親和性を見出したこと。（２）COSの思想に家族福祉論とシティズンシップ論の独自の結びつきを見出したこと。（３）福祉国家史研究におけるイデオロギー分析の有効性を示したこと。これらを通して、哲学的基礎の希薄な保守的救貧実践論に依拠したというCOSへの通説を修正することができた。以上の研究成果は、共著3点（うち英文1点）、学術論文2点、訳書1点、学会報告6点（うち国際学会3点）に結実した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
COSの社会福祉思想とニューリベラリズムの間に思想的共通点を見出したことで、世紀転換期のイギリス福祉国家思想を「社会的リベラリズムに基づく社会福祉思想」とトータルに捉えうる視座を得た点が最大の学術的意義である。また本研究の社会的意義として、COSの独自のシティズンシップ論の解明が挙げられる。家族福祉を重視するCOSのシティズンシップ論には不可視化されがちな家庭内のインフォーマル・ケアを、シティズンシップへの重要な貢献として社会的に再評価する視座を与えてくれるものである。

研究成果の概要（英文）：This study primarily achieved the following three results: (1) It identified an ideological affinity between the social welfare ideas of the COS and the New Liberalism. (2) It discovered a unique connection between family welfare theory and citizenship theory within the COS's liberal ideology. (3) It demonstrated the effectiveness of ideological analysis in the study of the intellectual history of social welfare. Through these three points, this study revised the conventional view that the COS relied on a philosophically weak and conservative poor-relief theory. These research outcomes have been published in three co-authored works (one of which is in English), two academic papers, one translated book, and six conference presentations (including three at international conferences).

研究分野：思想史

キーワード：慈善組織協会(COS)　ニューリベラリズム　シティズンシップ　イデオロギー　チャリティ

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

後期ヴィクトリア時代イギリスの代表的な民間救貧組織であった慈善組織協会(COS)の特徴については、福祉国家史研究の分野において、その（１）支援技法の先駆性と（２）保守的な政治思想の２点が指摘されてきた(Harris 2004; Humphreys 2001)。COS は友愛訪問員による聞き取りや観察結果に基づき個人に最適な援助を決定する「ケースワーク」という先駆的な支援技法を編み出したが、他方では、選別主義的救貧を擁護する立場から福祉国家的な社会政策の拡充にはあくまで反対し続ける保守の立場にあった、とする解釈である。

このような解釈は、もっぱら COS の救貧実践そのものの分析から導かれたものであり、COS の指導者達が残した社会福祉に関わるより一般的なテクストの検討は不十分なままであった。また政治理論・政治思想史研究の分野では、福祉国家を推進した「ニューリベラリズム」と COS の指導者のひとりバーナード・ボザンケの政治哲学上の共通性を指摘する研究も現れていた(Morefield 2002; Simhony and Weinstein (eds.) 2001)。ボザンケら COS の指導者の社会福祉をめぐる言説を検討し、同時代の思想史的文脈に位置づけ直すことで、イギリス福祉国家形成における COS の思想的役割に新たな解釈を提示しうるのでは、との仮説がここから導き出された。

２．研究の目的

（１）COS の指導者達（総書記 C.S.ロック、哲学者バーナード・ボザンケ、救貧法委員会多数派報告の起草者ヘレン・ボザンケ）のテクストを分析し、その社会福祉思想（人間観・社会観・チャリティ論・ケースワーク論）を整理する。そのうえで、（２）世紀転換期イギリスのニューリベラリズムの諸言説とかれらの社会福祉思想との関係を検証する。（１）（２）を通して、イギリス福祉国家形成期における COS の思想的位置づけについての新たな解釈を提示することが本研究の目的である。

３．研究の方法

C.S.ロックやボザンケ夫妻の社会福祉に関わる著作や論文を以下二つの観点からテクスト分析する。第一に、政治学者マイケル・フリーデンが提起したイデオロギー分析の方法を応用する。フリーデンは、所与のテーマについての概念の相互連関のパターンから異なるイデオロギーを分類する形態学アプローチを提唱した。第二に、T.H.グリーンや L.T.ホブハウスら、福祉国家形成を思想的に支えたニューリベラル達の言説と比較検討する。

４．研究成果

本研究は、次の三種類の成果を得た。

（１）COS の社会福祉思想とニューリベラリズムの間に思想的親和性を見出したこと

COS は、同時代のニューリベラリズムや社会主義が推進した福祉国家的社会政策に強固に反対したために、思想的には保守の立場にあると既存研究では理解されてきた。これに対して本研究は、COS の指導者であった C.S.ロックとバーナード・ボザンケが、オックスフォード大学ベリオル・カレッジで T.H.グリーンの薫陶を受けた事実に注目した。グリーンは福祉国家的社会政策を進めたニューリベラリズムの政治哲学を構築した人物であり、ニューリベラリズムの代表的思想家 L.T.ホブハウスに影響を与えたことで知られる。本研究は、グリーンの政治哲学・倫理学の詳細なテクスト分析を行い、彼の思想の中核的部分がホブハウス、ロック、ボザンケの思想に継承されたことを確認した。つまり、社会実践論の領域では対立したニューリベラリズムと COS であったが、グリーンの思想に遡ることで、共通善概念に基づく卓越主義的倫理や有機的社会観においては、両者の間に大きな共通性があることが明確になった。またシティズンシップ論においては、ニューリベラリズムと COS がグリーンから異なる思想的要素を継承したことも確認できた（国家－市民の垂直的シティズンシップ論を継承したニューリベラリズムと、市民間の水平的シティズンシップ論を継承した COS の差異）。

また、以下（３）のイデオロギー分析の方法を応用して、世紀転換期の貧困問題をめぐる社会実践論を、優生政策を重視した排外主義、民間慈善を重視した古典派リベラリズム、社会政策を重視したニューリベラリズムの三イデオロギーに整理した。そのうえで、COS の思想的立場は古典派リベラリズムに位置づけられること、ニューリベラリズムとは社会実践論において対立したものの、有機的な人間観・社会観において重要な共通性がみられることを確認した。

以上の研究成果を、政治思想学会学会誌への投稿論文「倫理的なシティズンシップのために」や英語論文集への掲載論文‘Poverty and Ideologies’に纏めた。

（２）COS の思想に家族福祉論とシティズンシップ論の独自の結びつきを見出したこと

COS の理論的指導者であった C.S.ロック、バーナード・ボザンケ、ヘレン・ボザンケの社会福祉思想を詳細に検討した結果、かれらの思想において、「個人－家族－シティズンシップ」のあ

いだに強固な概念的連関を見出した。「家族はシティズンシップの保育所」というバーナード・ボザンケの言葉が示すように、かれらは家族を「市民的徳」の涵養にとって不可欠の領域と認識したのである。恣意的支配からの自由と市民の義務を重視したかれらのシティズンシップ論は、多くの点で共和主義の伝統と重なる性格をもちつつも、私的領域である家族と公的領域における市民的徳の間に対立よりも必然的連関を見出した点で、共和主義とは決定的に異なる独自性も有していた。その背景にはデモクラシーの到来、リベラリズムの浸透、近代家族の成立という政治・社会の近代化がある。COS のシティズンシップ論は、共和主義的シティズンシップ論の近代的展開の一形態と解釈することができるだろう。

また、以上のシティズンシップ論をもとにヘレン・ボザンケは具体的な家族福祉論を展開した。その分析の成果を論文「ヘレン・ボザンケの社会福祉思想」に纏めた（本稿は、日本語でははじめてヘレン・ボザンケの家族福祉論を包括的に分析・整理した研究成果となった）。また、COS の家族論・シティズンシップ論について国内外で学会報告を行った。その成果を英語論文に纏め、今年中に国際学術誌に投稿予定である。

（３）社会福祉思想史研究におけるイデオロギー分析の有効性を示したこと

思想史研究に関わる複数の方法を比較検討した結果、マイケル・フリーデンの「イデオロギー分析」の有効性を確認することができた。イデオロギー分析は、所与のテーマに関して使用される概念の相互連関のパターンから、互いに「家族的類似性」をもつイデオロギーのグループ化を行う方法である。この方法を COS の社会福祉思想に応用した結果、（１）で示したようなニューリベラリズムとの類似性を論証することができた。社会実践論では対立する両者の思想は、人間論・社会論という社会福祉思想のより基礎的な次元においては、「社会的リベラリズム」と呼びうる共通のイデオロギー的土台の上に立っていたのである。かかるフリーデンのイデオロギー分析についての研究成果を、論文集の分担執筆「イデオロギー研究は「政治における正しさ」について何をいいうるか」や、フリーデンの主著『リベラリズムとは何か』の翻訳・解説に纏めた。

＜引用文献＞

Harris, B. (2004) *Origins of the British Welfare State*, Palgrave Macmillan.
Humphreys, R. (2001) *Poor Relief and Chairty 1869-1934*, Palgrave Macmillan.
Morefield, J. (2002) ‘Hegelian organicism, British new liberalism and the return of the family state’, *History of Political Thought*, 23(1): 141-170.
Simhony, A. and D. Weinstein (eds.) (2001) *The New Liberalism*, Cambridge U.P.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 寺尾範野	４．巻 20
２．論文標題 ヘレン・ボザンケの社会福祉思想　慈善組織協会(COS)におけるイギリス理想主義の思想的展開	５．発行年 2022年
３．雑誌名 早稲田社会科学総合研究	６．最初と最後の頁 1-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 寺尾範野	４．巻 20
２．論文標題 倫理的なシティズンシップのために：T・H・グリーンは障害者の権利をいかに認識したか	５．発行年 2020年
３．雑誌名 政治思想研究	６．最初と最後の頁 192-220
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計6件（うち招待講演　1件／うち国際学会　3件）

１．発表者名 Hanno Terao
２．発表標題 Idealism on Family: Citizenship, Common Good and the Philosophy of Charity Organisation
３．学会等名 Political Studies Association 74th Annual Conference（国際学会）
４．発表年 2024年

１．発表者名 寺尾範野
２．発表標題 能動的市民としての女性：福祉国家形成期イギリスにおける共和主義リベラリズムの家族福祉論
３．学会等名 社会思想史学会
４．発表年 2023年

１．発表者名 Hanno Terao
２．発表標題 Republican Liberalism Revisited: A Historical Case in Late Victorian Britain
３．学会等名 Free Society International Workshops, The Institute of Applied Ethics, University of Hull, UK（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 寺尾範野
２．発表標題 自立と協同の調和にむけて――ボザンケ夫妻の社会福祉思想――
３．学会等名 日本イギリス哲学会
４．発表年 2020年

１．発表者名 Hanno Terao
２．発表標題 Freedom as capabilities and freedom as self-realization: Comparing Martha Nussbaum and T.H. Green's Aristotelian liberalism on people with severe intellectual disabilities
３．学会等名 MANCEPT Workshops 2018（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 寺尾範野
２．発表標題 積極的自由とシティズンシップ：トマス・ヒル・グリーンにおける「社会の道徳化」構想
３．学会等名 政治思想学会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計4件

1．著者名 寺尾範野、新村聡、田上孝一	4．発行年 2021年
2．出版社 社会評論社	5．総ページ数 391
3．書名 平等の哲学入門	

1．著者名 Hanno Terao, Shujiro Urata, Kazuo Kuroda, Yoshiko Tonegawa	4．発行年 2023年
2．出版社 Springer	5．総ページ数 187
3．書名 Sustainable Development Disciplines for Humanity	

1．著者名 マイケル・フリーデン、山岡龍一、森達也、寺尾範野	4．発行年 2021年
2．出版社 筑摩書房	5．総ページ数 272
3．書名 リベラリズムとは何か	

1．著者名 寺尾範野、田畑真一、玉手慎太郎、山本圭	4．発行年 2019年
2．出版社 勁草書房	5．総ページ数 304
3．書名 政治において正しいとはどういうことか	

〔産業財産権〕

〔その他〕

ワークショップ「イギリス理想主義と現代政治思想」(8月21日) https://www.waseda.jp/fsss/iass/news/2018/07/24/701/

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計1件

国際研究集会	開催年
ワークショップ「イギリス理想主義と現代政治思想」	2018年～2018年

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関